

古東哲明著

『ハイデガー＝存在神秘の哲学』を読む

高橋 透

待望のハイデガー入門書。これが読後感。これまでのハイデガー入門書は『存在と時間』とその周辺を扱うにとどまるものが多かったし、研究書はハイデガーをハイデガー用語で解説するだけのものが目立っていたように思われる。古東哲明の『ハイデガー＝存在神秘の哲学』は、その点、異色である。ごく平易な——ハイデガーなら「簡素な」というであろう——言葉でハイデガー思想を語りながら、前期と後期のハイデガーに通底する立場を鮮やかに浮き彫りにしてくれる。

それにしても、なぜいま、ハイデガーなのか？ ハイデガーはすでに「古くさい」のだろうか？ もう問題にする必要さえないのだろうか？ そうとも言えるし、そうとも言えないだろう。たしかにハイデガーの耳慣れない独特の言葉使いは、かえって現代の耳には奇異に聞こえるであろうし、また彼はメディア文化やサイバースペースの快樂も、サブカル流行も、ヒトゲノム計画も、グローバル化現象も、そしてそれらが引き起こしている諸問題についても語らない。けれども彼の指摘する「ゲシュテル (Gestell)」という現代の病い——これは古い用語では「ニヒリズム」と呼ばれていたものだが——、要するに生にも、死にも満足できるあり方も理由もないという状況は、癒されるところか、ますます深く僕たちに侵入し潜伏している。その結果僕たちは、これが「病い」であるということさえも忘れ去っている。そもそも「病い」などと口することさえ、トレンドーではないのだ。けれども、気晴らしの見かけの愉快の後には、いつもこの「病い」が繰り返し現れてくる。

それでは、「ゲシュテル」とは何だろうか？ それは「追い立て、駆り立て、徴用する強制的なしくみ、ないし根源力」のことだ、と古東は言い、「強制的なフレーム」という訳語を提唱している。現代のテクノ・サイエンスは、「もはや人間が制作し操作する〈用具〉などという、のどかな素顔をしていない。むしろ人間的自由や理知や主体的行動を支配する超人為的構造がその背後で糸をひき、人間をたくみに使役している〈媒体〉」だ。この超人為的構造がゲシュテルであり、現代の人間はこの「強制的なフレーム」に追い立てられ駆り立てられている。このあたりの「事情は、ぼくたちが最近、まさに地球規模で感染した、あのIT革命神話をお考えになればよくわかるはずだ。経済を再生し、家庭や職場や医療や教育など、あらゆる場で、産業革命に匹敵するバラ色の未来が開かれるはずだったあの〈革命〉(中略)だが、結局、人間の手仕事が機械化されただけ。残ったのはIT不況とLT(労働技術)の空洞化とeカルチャー廃墟。これが最近ぼくたちを煽り立てた、典型的なゲシュテル・ドラマの顛末だ。暗部のニヒリズムのゆえ、科学技術的装い

をした希望の星という名のバブルに、ぼくたちはこんなによわいのだ。こうして表面上は技術の人間化というヒューマンイズムの背後に、用象化を強要する超絶構造（ゲシュテル）が、どっしりと鎮座しえたのである。「用象(Bestand)化」とは、あらゆるモノ（人間も動物も含む）を、人間の役に立つモノにしたてあげようとする利便性・効率性・合理性追求の立場のことであるが、ゲシュテルはこの立場に拍車をかける、すべての人間のものであるとともに誰のものでもないモーターなわけだ。映画『マトリクス』で未来の人類が機械のための電力供給源に成り下がるシーンは、超絶構造であるゲシュテルに支配される人間の状況をありありと物語る。臓器移植問題などで取りざたされる人間の資材化やモノ化を産み出しているのはゲシュテルなのである。

ゲシュテルとはだから、あらゆるものは人間のために、という考え方だ。それにしても、押井守があるインタビューで言っているように、「なぜ人間は人間にしか興味をもてないのか?」。ゲシュテルからはどのようにすれば逃れることができる——もしそれができるとして——のだろうか? ハイデガーの考えによれば、「エルアイクニスだけが、取引と人為操作の中へ喪失しているぼくたちを、救い出すことができる」。ここで少し「哲学的に」考えてみよう。僕たちの周りには様々なモノが存在している。僕たち自身も存在している。この世のすべては存在しているもの、「存在者」である。というか、僕たちは何かを見たり、聞いたり、感じたり、認識したりするときには、かならず何らかの「存在者」として捉えているということだ。動物にも何らかの存在理解があるのかもしれないが、とにかく人間は「存在者」という理解で自分の周りを、そして自分をも眺めているのだ。厳密に言えばだから、あらゆるものは人間のためにという「人間化」はすでにもうこのレベルで行われているわけだ。

けれども、人間が存在というフィルターを通してしかものを理解できないからといって、この理解でこの世のすべてを理解し極め尽くしたとは言い切れないのではないだろうか?。この疑問を考えるためには、存在者の本質である「存在とは何か」——これは西洋哲学が問い続けてきた問題だが——という問いを再び徹底的に問題視してみなければなるまい。これがハイデガーの思想の出発点だ。「〈在る〉とは端的にどういうことか。だが、ストレートに存在そのことを問おうとしても、すぐに奇妙な矛盾にでくわす。存在は、さまざまな意味で、その反対項のはずである無の性格をおびてくるからである。(中略)モノ(存在者)なら目の前に現れる。だから、物体や画像や意味概念として把握できる。(中略)一方、存在はどうか。存在はモノ(存在者)ではない。モノではないから現前しようがない。(中略)むろん目のリングの存在なのだから、すぐに手にとれるほど間近に〈在る〉ように思える。たとえば愛しいひと。手をのばせばその柔肌にふれることができる。しかとかき抱き、はげしい抱擁をかきねることも可能だ。だが、それは糞尿袋。モノなる肉体である。どんなにきつく抱きしめても、愛しいそのひとの〈存在〉を抱きしめることはできない。指一本、触れることすらできない。肉体関係はできても、存在関係はそんなことでできない。〈存在〉はモノではないからだ。存在はモノでもないし、存在者でもない。存在は、存在者に現れているようで隠れてしまう。「在るようで無い。つかもうにもつか

めない。かじろうにもかじれない。まるで透明人間や幽霊のような〈存在〉の現れよう（無くなりよう）」。(注1)

存在はどこまで行っても、どんなに追いかけても、つかめない。この状況は悪夢の連続であり、收拾のつかない悪無限である。これは存在をつかめるはずだと思っている人——つまり「形而上学者」——にとっては、無気味さや不安、そして虚しい思い、虚無感を抱かせる。この虚無感を前にした場合の態度は、さしあたり二通りあるだろう。まずは、存在が産み出すこの虚無感を、埋め尽くそうとする態度。つまり、つかみようにもつかめない存在は無視して、その代わりに、しかとつかめる存在者だけを拠り所にする態度。そしてさらに、このような存在が産み出す虚無の穴を、存在者で埋め立てて、充実感を味わおうとする態度。人間にとって理解しうる存在者だけを問題にするこうした態度が極限に達した形態が、先に指摘したゲシュテルである。けれどもこのような態度は、遅かれ早かれ矛盾を露呈してしまうだろう。なぜなら、存在が存在者を構成しているのだから、存在の、あのつかめなさやそこから産み出される不安・虚無感、存在者自身にも影を落とし、つきまとわざるをえないからである。虚無の穴を埋め、充実感を約束してくれるはずの存在者から、肝心の存在は抜け去り、僕らに残されたのは中空の抜け殻だけだから。こうしてこの態度は、ふたたび振り出しにもどり、そうとは知らぬうちに、あの悪夢の連続に飲み込まれていく。

これに対して、もうひとつの態度——これがハイデガーの行き方だが——は、存在が無化することを、つまり「存在と無は同一」という事態をとにかく受け入れることである。「存在が無であり刹那的だということは、じつは同時にすでに、存在のとうほうもない肯定性を逆証している。(中略)この、否定のゆえの肯定という奇妙な反転の論理と機微とを、以下、〈存在の神秘〉という一語にたくして語ってみたい」。存在が無化するということは、すべてのものを支えてくれるはずの存在という根拠が底なしであるというに等しい。しかし「存在が底なしであるとは、存在が底をなしているということにはほかならない。(中略)存在を無根拠と洞察することは、存在が根拠だと、根底的なのだと、明察することにひとしい。この奇妙な逆説をシェイクスピアは〈底は底なし〉と表現した。めまいがしそうな逆説だが、わかってしまえば、じつに単純な底なしである。たとえばピンの底をお考えいただきたい。いうまでもなくピンの底は、ピン全体をささえる土台である。だが土台をなすピンの底それ自体に、底はないはずだ。もしかりに、ピンの底のさらに下か内部かどこかに、ピンの底をささえる〈さらなる底〉があるとしたら、そのさらなる底がほんとうの底になり、もはやピンの底は、底とはいえなくなるからだ。だからもし、なにかが底(根拠)をなすものなら、その底それ自体は底無し(無根拠)でなければ、論理的にも、事実

注1：ハイデガーの言う「存在」は、それとして捉えられないものであるからといって、カントの「物自体」ではない。なぜなら、物自体は、現象と本質の間の弁証法のプロセスに巻き込まれざるをえないというヘーゲルによる批判に十分に答えるものではないかぎり、それは、「存在」を主観性によって措定された存在者とみなす見方に、つまり存在の「人間化」にとどまらざるをえないからである。

としても、おかしいことになる」。底であるためには底は底無しでなければならないのだ。存在もそれ自身が底無しであることで、かえって、あらゆる存在者を支える存在となることができるのである。(だから、存在は「隠れたる神」のようにどこかに隠された根底などではない)。存在の無化は反転して、存在者に存在の充溢を贈り与えるものとなる。存在は自ら身を引くことによって、存在を、つまり自らを与える。(これがハイデガーの言う「存在の贈与」)。「無のなかの底なき深みに、在ることの豊穡さが隠されている」のだ。これが、古東がハイデガー哲学の中に見て取った「存在神秘」というハイデガー哲学のアルファーでありオメガである。つまり、ハイデガー哲学の歩んだ「道」、存在の無化の不安・虚無感から存在の豊穡な贈与へと反転・転回する、「救済」への道である。

最後にハイデガーのこのような道行きに対して疑問を投げかけておきたい。彼は存在の底無しの無をかいま見ながらも、この無が存在の豊穡さを与えて救ってくれることに賭けているが、これは存在が人間に意のままにならないことを認めながらも、この人間とは無関係のはずの存在が、なぜか人間だけは大切に扱ってくれるはずだと考える、淡い期待とでもいったものではないだろうか？ しかも「存在は人間だけを気にかかる」などと、どうして断言できるのだろうか？ このような行き方は、「なぜ人間は人間だけに興味をもつのか」という人間の特別視に対する疑問に答えずに終わってしまうであろう。人間間だけでなく、動物から人間への臓器移植や、ヒューマノイド・サイボーグといった機械と人間の「共生」が実現に近づき、動物と人間、機械と人間の間の線引きがあいまいになりつつある現代、「なぜ人間は人間だけに興味をもつのか」という問いは熟考に値するであろう。

さらに、以上のような形の疑義は、ゲシュテルからの「救済」について次のように述べられた箇所にもあてはまる。ゲシュテルから「救いようがないと、心底から諦めたそのとき。おそらくそのとき突然、落雷のように思いもかけないなにか救済のようなものが…。否定性をまるごと受容したとたん、べつの光沢を帯びてしまう奇妙な反転劇の進行が…。つまり、存在が反転して救済してくれるというのであるが、なにか「他力本願的」とでも言いたくなるこのような救済願望は、人間の側の都合にすぎないのではないだろうか？むしろ人間は自分自身の欲望に対してどのように向き合っていくべきかを考えるべきではないのだろうか？ ハイデガーが危惧するように、欲望の行使は最終的には「意志」の哲学に還元されるのであって、ナチズムへと、ひいてはゲシュテルへと繋がらざるをえないのであろうか？ ハイデガーも認めるとおり、欲望(たとえばテクノ・サイエンスの、つまりゲシュテルの)は行使しつづけるべきであるし、それから逃れることなどできないであろう。そして存在者だけに執着するゲシュテル構造を問題にするためには、存在は存在者ではないという事態、つまり「存在論的区別」を認識し、それを經由しなければならないことは疑う余地はない。以上を踏まえたとえさらに考えるべきことは、しかしながら、欲望を行使しつつも、なおかつ同時に欲望に責任をもつ仕方とはどのようなあり方なのかということであろう。